

# 「山月記」の季節について

三 浦 吉 明

はじめに

中島敦の「山月記」は、高等学校の現代文教科書の定番教材の一つでもあり、多くの人が、高校生時代に読んだ作品であろう。周知のように、この作品は中国唐代の伝奇小説「人虎伝」をもとに、中島敦が主人公李徴の心理を描いた近代小説として創作したものである。そのテーマなどについては、すでに数多くの研究がなされており、もはや私の述べることもないが、作品鑑賞の上で、あまり触れられておらず、不明とされていることがあるので、その点について私見を述べてみたい。さて、その不明とされている点とは何かというと、「山月記」中の重要な場面である李徴と袁儻の出会いがあったのはいつの季節のことなのかということである。

この作品を読んで、その季節はいつと思うかと問えば、「秋」と答える読者は多い。これは正解であり、したがって季節感を感じさせることは記されているはずなのであるが、なぜそう感じるのかと問うと、それに明確には答えられない。その理由は、秋らしさを感じさせる言葉がいくつか有るが、それが秋であると断定させるまではいかな

いという点にあるようである。そこで、それがなぜ秋なのか、また、それが秋のいつごろなのかを述べてみようというのが小論の目的である。

### 作者中島敦と漢文について

まず、作者中島敦の生い立ちと漢文との関係について、年譜等に従って記しておくこととする。彼は中島田人の子として明治四十二年に生まれた。田人は中学校の漢文教員であり、その父（敦の祖父）の中島撫山は亀田鵬齋の子綾瀬に学んだ漢学者である。敦は生後一歳未満で生母と生別し、その後、祖父母に預けられてもいる。祖父中島撫山は敦三歳の時に死んでおり、直接の影響は考えられないが、そのような環境の中で、漢籍に親しんだことは想像に難くなく、中島敦に影響を与えた中国の古典としては、『莊子』『列子』『春秋左氏伝』『史記』などが指摘されており、また彼の作品としては中国古典にもとづく、「李陵」「悟浄出世」「悟浄歎異」「弟子」「名人伝」などの作品があることを指摘しておけばよいであろう。

さて、なぜこのようなことを指摘しておくかと言えば、作者中島敦は漢籍に現れる約束ごとは十分に理解していたはずであるということを確認しておきたかったからである。そうした上で、「山月記」に入っていくこととしたい。

### 「山月記」のあらすじとキーワード

出来事を記す文章では、いつ、どこで、だれが、何を、どうしたのか、ということを書き記すことが重要なこととされる。私を取り上げようとする季節も「いつ」の問題なので、「山月記」において「いつ」ということがどこまで明白になっているかということを書き、まず確認しておくこととしたい。

隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、……

「山月記」冒頭の部分である。天宝は唐の玄宗の年号で、元(七四二)年から一五(七五六)年の中頃までの約一四年間であり、天宝一四(七五五)年はあの安祿山の乱の起こった年である。「山月記」がもとづいた「人虎伝」では、天宝十年の春に進士に合格したとあり、作者は安祿山の乱の直前に若くして科挙に合格したという設定にしているということに理解しておけば良いであろう。さてその後、江南尉となった李徴は、狷介な性格と自らの才能に対する自尊心とが災いしてその地位に甘んずることができずに、故郷に帰り、詩によつて文名を上げようと図るが、それもならず、妻子の生活のために再び官職に就く。しかし、そのような生活にも満足できない彼は、ついに公用の途中で発狂し、消息を絶つてしまうのである。

その翌年、同時に科挙に合格し、監察御史に出世していた袁愔が、公用で旅をする途中、現在の河南省にある商於の地で、虎に姿を変えてしまった李徴と再会する。その再会までの部分を引用してみる。

翌年、監察御史、陳郡の袁愔という者、勅命を奉じて嶺南に使いし、道に商於の地に宿つた。次の朝まだ暗いうちに出発しようとしたところ、馭吏が言うことに、これから先の道に人食い虎が出るゆえ、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、いま少し待たれたがよろしいでしょうと。袁愔は、しかし、供回りの多勢なのをたのみ、馭吏の言葉を退けて、出発した。残月の光を頼りに林中の草地を通つていったとき、

果たして一匹の猛虎が草むらの中から躍り出た。虎は、あわや袁儻に踊り掛かるかと見えたが、たちまち身を翻して、もとの草むらに隠れた。草むらの中から人間の声で「危ないところだった。」と繰り返しつつぶやくのが聞こえた。その声に袁は聞き覚えがあった。驚懼のうちにも、彼はとっさに思い当たって、叫んだ。「その声は、我が友、李徴子ではないか？」袁儻は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少なかった李徴にとっては、最も親しい友であった。温和な袁の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかったためであろう。

草むらの中からは、しばらく返事がなかった。忍び泣きかと思われるかすかな声が時々漏れるばかりである。ややあつて、低い声が答えた。「いかにも自分は隴西の李徴である。」と。

この文章によれば、袁儻は夜明け方に宿を出発している。この後の場面も、それからの時間の枠に沿って展開してゆく。

さて、小説などでは、普通ある出来事が発生したときには、それがいつなのかを何らかの方法で記すであろう。しかし、この場面には、時刻は明確に記されているが、季節に関してはそれを知らず掛かりはない。文中の「残月」をそれと思う人もいようが、実は、「残月」は季節を表す言葉にはならないのである。このことについては後述する。このような形で始まった李徴と袁儻の再会は、その後の部分はほとんど、会話のやり取りであり、季節を現すような言葉は無いように見える。しかし、本当に作者はこの出来事を季節を考えずに設定しているのだろうか。そうであるとすれば、この小説の設定としてはあまりに不自然であるし、会話と会話の間には、自然や時刻を描写する言葉が多すぎるのではないであろうか。実はその後の部分で、作者は季節を明確にする言葉をさりげなく挟み込んでいるのである。

時に、残月、光冷ややかに、白露は地にしげく、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。人々はもはや、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄幸を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

李徴の独白の途中に挟まれた部分である。そして、ここに現れた「白露」と「冷風」が季節を明確にするキーワードなのである。それがなぜなのかは、節を改めて述べることにしたい。

### 隴西の李徴について

本論に入る前に、「隴西の李徴」について述べておきたい。なぜこれについて述べるのかと言うと、高校の指導書などを見ると、この点についてあまり理解されていない<sup>4</sup>ようだからである。

さて、漢籍を読み慣れている人にとっては常識であるが、中国の歴史書において個人の伝記を記す場合、「○○の人」と言う地名の○○は、彼の本籍・本貫に当たる土地であり、それは彼の祖先がその土地に居を構え、それ以来彼の一族はそこを出身地としてしているということを記すのであって、彼自身の生まれ故郷とはかぎらないのである。

これを李徴について当てはめると、「隴西」は彼の本籍・本貫を示しているのであって、彼自身の出生地・故郷ではない。彼自身の出生地・故郷は後の部分に「故山、かきやん統略に帰臥し、」と出てくる統略（現在の河南省の地）である。それでは、「人虎伝」では書き出しの部分がどう記されているかという点、それは次の通りである。

隴西の李徴は、皇族の子にして、しやく統略に家す。

「人虎伝」では李徴は皇族の子ということになっている。唐王朝の初代高祖は李淵と言ひ、隋王朝の文帝の姻戚にも当たる人物である。『新唐書』高祖本紀の初めを少し引用すると、

高祖、神堯大聖大光孝皇帝、諱は淵、字は叔徳、姓は李氏、隴西成紀の人なり。(中略)(父の)仁公は高祖を長安に生む。

高祖の父仁公は、隋王朝で唐公に封ぜられた人である。文中に明確に記されているように高祖の生地は長安であるが、その高祖も「隴西の成紀の人」とされる。つまり、「人虎伝」で李徴を隴西の人とするのは、唐王朝の一族であるということにもとづくものなのである。以上から、隴西が本籍・本貫であることは納得されるであろう。

さて、「隴西の李徴」については、これまでとして、本論に戻ることとする。

## 季節はいつか

先に「白露」と「冷風」が季節を明確にするキーワードであると述べた。結論を先に述べれば、「山月記」の季節に関する問題の答えは、孟秋七月ということになる。その証拠としては、『礼記』月令の孟秋の次の文が挙げられる。

孟秋の月、日は翼に在り、昏には建星中し、日には畢中す、其の日は庚申、其の帝は少皞、其の神は蓐收、其の蟲は毛、其の音は商、律は夷則に中り、其の数は九、其の味は辛、其の臭は腥、其の祀は門、祭には肝を先にす。涼風至り、白露降り、寒蟬鳴き、鷹乃ち鳥を祭る。用て始めて戮を行ふ。……(『礼記』・月令)

『礼記』は言うまでもなく五経の一つで、儒教の経典の一つである。ただし、『礼記』が成立したのは漢の時代に入ってからであるが、漢の時代に入ってから新しく作られたものではなく、それ以前から伝わる礼に関する書籍などを集めて作られたものと考えてよい。さてここに、「涼風至り、白露降り、」という文章がある。これが、私がキーワードと述べた部分である。しかしこれだけでは、まだ理解しにくいであろうし、「涼風」と「冷風」は文字上は異なっている。そこで、月令とは何かということから、順を追って説明をしたい。

### 時令説について

月令とは、簡単に言えば十二月ごとの天文・暦法や自然現象を記すとともに、天子がそれに従っていかなる政治を行うべきかを記したものである。先程の『礼記』月令の文を解釈すればおおよそ次のようになる。

孟秋の月、太陽と月との巡り合いは（二十八宿の）翼宿のところまで起こる。この月には日暮れには建星が南中し、夜明けには畢が南中する。秋の日を支配する天干（十干）は庚と申（五行で言えば金）であり、秋を支配する帝は少皞であり、その下にある神は蓐收である。秋の動物は毛の類（けもの）であり、その楽音は（五音の中の）商、十二律は夷則に当たり、その数は九、その味は辛、その臭いは腥（なまぐさい）、家屋では門を祭り、祭祀の際には肝臓を先にお供えする。この月には涼風が吹き、白露が降り、寒蟬（つくつくぼうし）が鳴き、鷹が捕らえた小鳥を祭る。このように陰の気が支配する季節になったので始めて刑罰の執行を実施する。……

このように季節の変化にあわせて天子の行う政治も変わるべきだという考え方を時令説と言う。この時令説の考え方は漢代に初めて起こったものではなく、長い伝統のあるものと考えられる。『礼記』月令と同じものとしては、秦の始皇帝の宰相呂不韋が編集させた『呂氏春秋』の十二紀にもあり、また同じ前漢の時代にまとめられた『淮南子』の時則訓にも似たような文章がある。この思想は日本にも大きな影響を与えており、たとえば孟春の月の「獺魚を祭る」は俳句の季語として歳時記にも取り上げられているし、また、『古今和歌集』の春夏秋冬の部立てにも、この月令の影響が現れている。

さて、引用文からも分かるように、時令説では春夏秋冬各々の時期の事物・人事・気象そして自然現象に、その時々特定の言葉が用いられており、それらの言葉は中国古典の読解の時には必要な知識なのである。ここでは、孟秋の季節に「涼風」と「白露」という語が並んで用いられているということを確認しておいて、次の問題に入ってきたい。

## 残月について

「涼風」と「白露」について検討をする前に、後で細かな時期を確定する上で必要になるので、先ほど保留しておいた「残月」という語について検討しておく。残月（または月の描写）は「山月記」では三回出てくる。そのうちの一回は前に引用した袁修が公用で旅をする途中に李徴と再会するまでの部分である。（これをAの部分とする）

残月の光を頼りに林中の草地を通っていったとき、果たして一匹の猛虎が草むらの中から躍り出た。

もう一つは先程引用した涼風と白露の語が出てくる部分である。(Bの部分)

時に、残月、光冷ややかに、白露は地にしげく、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。

三つ目は「山月記」の最後の部分で、袁儻が、離れた丘の上から見た李徴の最後の姿を描写したところである。(Cの部分)

虎は、既に白く光を失った月を仰いで、一声三声咆哮したかと思うと、また、もとの草むらに躍り入って、再びその姿を見かけた。

これらの月の描写は多くの人々の指摘するとおり、物語に時間の経過を告げる働きをしている、作者の巧みな表現技巧であると言える。

さて、残月について漢和辞典では、「ありあけの月・夜明け方の月・残のつき」(『大漢和辞典』大修館書店)「夜明けの空に消えそうになっている月」(『新字源』角川書店)とある。中国の辞書でも「謂將落的月亮(まさに沈もうとしている月を言う)」(『漢語大詞典』上海辞書出版社)「①言暁来之月也(暁が来る頃の月を言う)。②言將落的月也(まさに沈もうとしている月を言う)」(『辞源』台湾商務印書館)とあり、いわゆる有明の月に近いものと考えてよいであろう。ただ日本の有明の月は十六夜(十六日)、立ち待ち(十七日)、居待ち(十八日)、寝待ち(十九日)の後で、二十日以降の月であるが、中国では十六日の既望の以外には、一般によく用いられる月の表現は無いようなので、既望以降の月を大きく残月と呼ぶと考えられる。

以上のことを前提としてAの文章を考えると、まだ太陽の出していない時刻に「残月の光を頼りに林中の草地

を通つていった」とあるからには、この残月の光はある程度の明るさがあったと思われ、月末の月とは考えにくい。断定はしにくいだが、半月程度の大きさはあったと考えるのが適当<sup>(10)</sup>ではないであろうか。それは、かなり時間が経過した後の、Cの文章からもうかがえることである。「虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮した」とあり、ここでは月はまだ地平線近くまでは落ちていないということが分かる。このような月は二十日前から二十五日ごろまでの月であろう。したがってこの小説ではおおよそ旧暦の十八日ごろから二十五日ごろまでのことと考えられる。

次に、先程、残月は季節を表さないと述べた。残月という語の用例を『大漢和辞典』（大修館書店）で見ると、唐詩が四つほど挙げられており、唐の頃から用いられている言葉のようである。その中で一番古い宋之問の「早に始興江口を発して虚氏村に至る作」（五言排律）の一部を引用してみる。

候曉踰閩嶂

曉を候ちて閩嶂を踰え

乗春望越台

春に乗じて越台を望む

宿雲鵬際落

宿雲鵬際に落ち

残月蚌中開

残月蚌中に開く

（唐詩選）

この詩の季節は春である。

次に顧況の「角を聴きて帰らんことを思ふ」（七言絶句）を挙げる

故園黄葉滿青苔

故園の黄葉青苔に満ち

夢後城頭曉角哀

夢後城頭曉角哀し

此夜断腸人不見

此の夜断腸人見えす

起行残月影徘徊

起行すれば残月影徘徊す

(唐詩選)

この詩は、「黄葉」の語からも分かるとおり、秋の季節の作品である。

以上のことから、「残月」は月の何日頃かを示す語ではあるが、季節とは関係の無い言葉であるということが分かるのである。そこで次に、季節を表す言葉の方の検討に入ることとしたい。

### 冷風と涼風について

ここでは季節を表す言葉の検討に入るが、まず、『礼記』月令に現れる「涼風」という語について述べておきたい。中国古典では、涼風とはたんに涼しい風という意味ではない。中国には古くから八風という考え方があり、涼風はその八風の一つの名称なのである。

日冬至を距てて四十五日にして條風至る。條風至りて四十五日にして明庶風至る。明庶風至りて四十五日にして清明風至る。清明風至りて四十五日にして景風至る。景風至りて四十五日にして涼風至る。涼風至りて四十五日にして閭闔風至る。閭闔風至りて四十五日にして不周風至る。不周風至りて四十五日にして広莫風至る。

(『淮南子』天文訓)

高誘の注によれば、「涼風」は坤卦の風である。坤は方角では西南であり、西南の方角から吹いてくる風を言う。またこの文章によれば、涼風は、冬至より二百二十五日目に吹く風である。冬至から二百二十五日目はほぼ立秋の

日に当たり、涼風は立秋の頃に吹く風でもある。つまり、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」という『古今和歌集』の歌に読まれた風は涼風<sup>12</sup>なのである。

さて、『礼記』月令の季夏には、次のような文章がある。

季夏月、……温風始至。……

この文について、『礼記』月令よりも先に成立したと考えられる『呂氏春秋』十二紀や『淮南子』時則訓などには、「涼風始至」とあり、これについて諸注では「涼風始至」の方が正しいとする。この説に従って文字を改めると、季夏の六月には涼風が吹き始めるといふこととなり、私が今まで述べてきたことと矛盾することになるが、実は、季夏の六月に立秋の風（涼風）が吹き出すことがあってもなんら問題はないのである。この点に関しては、後述する。

以上、『礼記』月令の涼風について述べてきたが、『山月記』では「冷風」ではないかという疑問が生ずるのである。次にこの点について述べていくこととしたい。

「涼」と「冷」の異同であるが、実は、「涼」と「冷」が通用したと考えられるのである。許慎の『説文解字』によれば、「冷」については「寒なり。夆に従ふ令の声<sup>13</sup>」とある。一方「涼」については、「薄なり。水に従ふ京の声」と言う。段玉裁注に引く鄭司農の説では「涼は水を以て酒に和するなり」といふことで、本来「すずしい」といふことではなく「薄い、薄める」ということであつた。これが「薄めれば則ち寒を生じ、又引伸して寒と為す」といふことになり、ここで、「冷」と「涼」が「寒」ということで同じことになるのである。なお、段玉裁注に引く『字林』では「涼は微寒なり」、『集韻』では「涼」の字に注をして「薄寒をば涼と曰ふ」としており、これは現代の我々が感ずる「冷」と「涼」の字の違いに近いと思われる。しかし、基本的には「冷」と「涼」が通用する

ということは理解できるであろう。これを明確に表現しているのが、宋代の韻書『集韻』の次の文章である。「涼……一に曰はく、冷なり」また、現在発行されている辞典で見ても、「冷」の項に、「寒であり、涼である。熱」と対立する。<sup>(15)</sup>（『漢語大字典』四川辞書出版社他）とある。

以上の説明で、「冷」と「涼」が通用したということは証明できたと考える。

さて、我が国でも「冷」の文字が、「涼」と通用したということを示す例をいくつか挙げてみたい。まず『万葉集』からである。

冷風之千江之浦廻乃木積成心者依後者雖不知

秋風あきかぜの千江ちえの浦うらみの木積こつみなす心こころは寄りぬ後のちは知らねど

（『万葉集』巻十一・二七二四番）

この「冷風」を「あきかぜ」と読むのは、異説もあるが古くからのほぼ共通した読み方のようにある。これをなぜ「あきかぜ」と読むのかについて、伊藤博氏<sup>(17)</sup>は『秋』の原文「冷」は「涼」の意。』とされる。これは、先に引用した『集韻』によつて証明できるものと考えられる。

次に、季節を表す言葉といえば、すぐに俳句の季語が浮かんでくるが、季語が日本の古典のみならず中国の古典にその源を発していることは周知の通りである。そこで、その季語を集めた歳時記を探してみる。様々な歳時記が出版されている中で、『図説俳句大歳時記』（角川書店）は、考証が詳しく、伝統的な解釈が多く集められているので、その中のいくつかを挙げてみたい。同書の「冷やか」<sup>(18)</sup>の項である。

連『至宝抄』（天正一三）『花花草』（寛永一三）以下に七月。ただし、『通俗志』（享保三）『暦』（安永六）には「冷

やか」を七月、「冷える」を兼三秋とし、……『忘貝』（弘化四）には「風冷やか」を七月、「冷やか」を兼三秋とする。……○『御傘』（慶安四）に「ひややか、初秋のことなり。暮秋にはかなはず」……○『三湖抄』（寛文四）に「びややか」は初秋なり。……『涼しき』は、八月末より九月末まで。……○『温故日録』に「冷やか」という詞、初秋なり」……○連『産衣』（元禄一一）に「初秋に限るなり、仲秋のはじめまで苦しかるまじきなり」○『滑稽雑談』に「説文に云、冷は寒なり。（中略）同（連歌新式）秘抄に云、びややか」は秋なり。初秋に用ふべし。……」

ここに挙げられた例を見るとは、多く「冷やか」を初秋としていることが分かる。つまり、「冷」の文字を初秋ととるのが伝統的な解釈だと考えられるのである。その原因は、『礼記』月令の「涼風」に関して、「冷」と「涼」とを通用していたからと考えられるのではないであろうか。特に、『忘貝』の「風冷やか」を七月としているのは、明確に「冷」と「涼」との通用を証明していると考えられる。

以上、「冷」と「涼」とが通用し、「山月記」の「冷風」は「涼風」の意味であるということとを述べるとともに、日本では「冷風」を七月とする伝統のあることについても述べた。これらのことから「山月記」の文章は初秋七月のことであるという推定は可能であろう。

## 白露について

次に「白露」について考えてみたい。「露」といえば色は白ということ、何ら疑問の起きそうもないような気

もするが、ことはそう簡単ではない。次の詩を見ていただきたい。

月夜憶舎弟

月夜舎弟を憶ふ

杜甫

戍鼓断人行

戍鼓人行断へ

边秋一雁声

边秋一雁の声

露従今夜白

露は今夜より白く

月是故郷明

月は是れ故郷も明らかならん

………

(唐詩三百首)

杜甫の五言律詩の前半である。「露は今夜より白く」なるのはなぜか。実は今日が白露節だからである。

陪竇侍御泛靈雲池

竇侍御に陪して靈雲池に泛ぶ

高適

白露先時降、

白露時に先んじて降り

清川思不窮

清川思ひ窮はまらず

……… (中略) ……

夕陽連積水

夕陽積水に連なり

辺色満秋空

辺色秋空に満つ

……

(唐詩選)

高適の五言排律の一部である。

「白露時に先んじて降り」というのは、季節は秋ではあるが白露節の前なのに、白い露が降りたというのであり、白露は白露節になって降りるというのが前提の表現である。

次に、蘇東坡の「赤壁の賦」も引用してみる。

赤壁賦

蘇東坡

壬戌の秋、七月既望、蘇子客と舟を泛べて、赤壁の下に遊ぶ。……白露江に横はり、水光天に接す。<sup>19)</sup>……

この文章に書かれたのは、元豊五(一〇八二)年、壬戌の年の秋、七月の十六日(既望)のことである。その日に、白露によって発生したもやが水面に横たわっているというのである。『礼記』月令の孟秋七月と一致した記述と言える。このように白露というのは、漢文の文章中では普通ある特定の時期に使用されるものなのである。その特定の時期とはもちろん二十四節気の中の白露節(現在の太陽暦では九月八・九日頃)である。

さて現代でも、天気予報などで二十四節気についてはよく触れられる。しかし、古い時代の人にとっては二十四節気は現代の我々よりもっと身近な、日常生活に密着したものであった。それは、二十四節気が太陽の運行にもとづいたものであり、季節の変化を明確に示すものだからである。したがって、二十四節気に現れる白露を他の季節に用いるということは考えられず、それを理解していた筆者は、当然そういう意味でこの言葉を使用していたはずなのである。

しかし、二十四節気を調べてみると、私が述べた初秋七月と矛盾する記述があることにすぐ気が付くであろう。では、二十四節気とは何か、その矛盾はなぜなのか、この点について説明をしたい。

## 二十四節気と太陰太陽暦の基本

前節では白露節について述べたが、ここでは、そもそも二十四節気とは何かということについて、述べてみたい。まず二十四節気を挙げてみる。

### 二十四節気

立春	正月節	雨水	正月中
啓蟄	二月節	春分	二月中
清明	三月節	穀雨	三月中
立夏	四月節	小満	四月中
芒種	五月節	夏至	五月中
小暑	六月節	大暑	六月中
立秋	七月節	処暑	七月中
白露	八月節	秋分	八月中
寒露	九月節	霜降	九月中

立冬 十月節

小雪 十月中

大雪 十一月節

冬至 十一月中

小寒 十二月節

大寒 十二月中

前述の矛盾とは、白露が七月ではなく八月節となっていることである。白露が八月ならば、蘇東坡の詩の七月と  
 いうのは成り立たなくなるであろう。この点の説明ができなければ、私の説も成り立たないこととなる。そこで、  
 この点について説明をしたい。

二十四節気については、現在使われている名称が古くから存在したか否かは別として、その成立はかなり古いも  
 のと考えられる。なぜならば、二十四節気によって、いわゆる太陰太陽暦（旧暦）の置閏法が完成したと考えられ  
 るからである。

周知のように太陰太陽暦では、月の動きを中心にして暦を作る。月は見かけ上、地球を約二十九・五日で一周す  
 るので、一か月は小の月が二十九日、大の月が三十日となる。この計算でいくと、一年はおおよそ三五四日とな  
 り、太陽暦の三六五日と十一日の誤差ができる。この誤差をそのままにしておく、数年後には月と季節の関係が  
 大きくずれてしまう。そこで、季節のずれを無くすように考えられたのが、閏月（22）である。では閏月はどのようにし  
 て決められるのか。そこで作り出されたのが、二十四節気である。季節のずれを無くすためには、太陽の動きを観  
 測し、それに従って調整を行う必要がある。太陽の動きは、冬至から次の冬至まで、約三六五・二五日あるが、そ  
 れを二十四等分し、冬至を最初として時間上で同一の間隔を挟む二十四の点を定める。これが、二十四節気である。  
 したがって二十四節気は本来時間上のある点であるが、普通その点を含んだ日を言う。

さてその上で、太陰太陽暦では各々の月をどのようにして決定するのかというと、二十四節気を十二か月に配当し、それを節と中とする、(前掲の二十四節気を参照) その上で、「〇月中」を含んだ月を〇月とする。正月を例にとると、雨水(正月中)を含む月が正月であるが、立春(正月節)は必ずしも正月ではない。そこで、

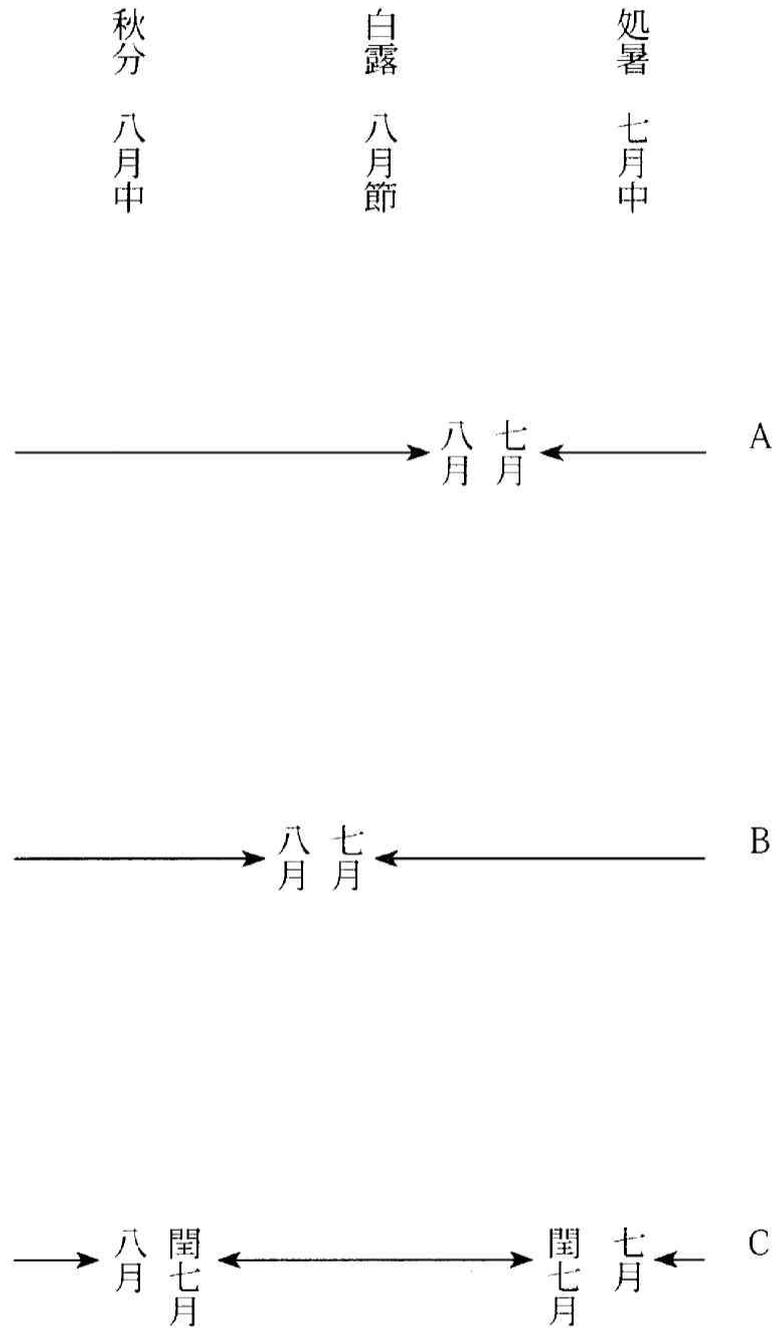
年のうちに春は来にけりひととせを去年とやいはん今年とやいはん<sup>23</sup>

(『古今和歌集』春)

というような歌が詠まれることになるのである。

さて、約三六五・二五日を二十四等分すると、節気と節気の間は約十五・二二日である。したがって二つの節気の間は約三十・四四日となり、太陰太陽暦の大の月の三十日よりも多くなる。つまり、三十日(あるいは二十九日)の中に、節気が一回しかない月ができることになる。その時、その唯一の節気が〇月中の場合はその月となり、〇月節である場合は閏月となって、前月と同じ月が閏月として置かれるのである。(十九年に七回生じるので、十九年七閏の法と言う。)

これを白露の場合で説明すると、白露は八月節であり、秋分が八月中なので、白露節は太陰太陽暦では七月か八月になるということである。「山月記」の場合に当てはめてみると、三つの場合が考えられる。それを次の表を見ながら考えてみる。



Aは白露節が八月になる場合である。この場合、八月中の秋分が月の後半に来るので、白露節は月の前半となる。一節気を十五日間と考え、白露節を月の半ばの直前にすれば、なんとか残月との矛盾は生じないであろう。ただしこの場合、前述の初秋七月を表す「冷風」との間に矛盾を生じるのである。したがって、Aは「山月記」では該当しないことになる。Bは白露節が月の後半に来る七月である。この場合は残月及び冷風との矛盾は生じない。Cは閏七月である。前述したようにこの場合は処暑と秋分の間が約三十・四四日であるから、処暑は月末、秋分は月の

初めとなり、白露節は満月の十五日または翌十六日頃である。この場合も、一節気を十五日と考えれば、その後の残月は矛盾しない。ただし、閏七月というのは、前述のように十九年間の中で七回生じる閏月が、十二か月の中の七月になるということであり、その確率は非常に低いのである。<sup>24</sup>

以上をまとめると、「白露」と「冷風」の二つの言葉を満足させるのは、太陰太陽暦の七月と考えられるということであり、これに、先述した残月の条件を加えると、太陰太陽暦孟秋七月の十八日頃から二十五日頃までの間ということになる。

なお付け加えれば、先程述べた季夏の六月に「涼風」が吹き出すのが矛盾しないというのも、立秋が七月節だからなのである。

## まとめ

以上、「白露」と「冷風」の語から、「山月記」での李徴と袁修の出会いは、太陰太陽暦（旧暦）の七月の十八日頃から二十五日頃までの間であるということが確認された。もちろん、作者は『礼記』月令の初秋の記事の基づいて、「白露は地にしげく、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。」と記したのであろう。そしてこれは、暦の方面から見ても正しい表現だったのである。

私が「山月記」を読み、「白露」と「冷風」という言葉を見てすぐに思ったのは、李徴と袁修の出会いは単に秋だということであった。それは漢文の世界では当然の表現と想っていたからであるが、様々な書物を見ても、秋

と断定しているものは見当たらず、「秋か？」と疑問にしているものを見かけるだけであった。私には中島敦がこの作品を書く時に、季節をあいまいにしているとは全く考えられなかったし、この話で、季節感が無視されていとも全く考えられなかったのである。そこで、『礼記』月令等を参照しながら、考察をしたのが小論である。最初、単に秋とのみ思っていたのが、秋の中でも孟秋七月の十八日頃から二十五日頃までの間と狭く限定できたのは、作者が「白露」「冷風」そして「残月」と、漢文の世界での言葉遣いを明確に意識して使っていたからであろう。

日本の文学の中に、漢文の世界の影響があるということは、よく指摘されることである。しかしながら、それを一つ一つ検証するのはなかなか困難なことではある。小論はその検証を行おうとした一つと言える。小論が漢文と日本の古典の影響関係についての理解の一助となれば、筆者としては望外の喜びである。

## 〔注〕

(1) 一般に言われる現代文の定番教材とは、各教科書会社が出している現代文の教科書に多く取られているものをさす。具体的には、一年生の教科書では芥川龍之介の「羅生門」、二年生の教科書では中島敦の「山月記」や、夏目漱石の「こころ」、三年の教科書では森鷗外の「舞姫」などである。

(2) 例えば、明治書院の「現代文」平成十年版検定済教科書用の指導書にはこれについては一言も触れられていない。

私は、高校の指導書にも触れる機会がある。高校の指導書は、各項目の筆者が様々な資料を広く探して、ほぼ定説とされるものを記したものである。そこに、このような重要な点についての記述がないということは、定説がないと言ってよいと、私は考

えている。

- (3) 『研究資料現代日本文学2』(明治書院) 四七頁
- (4) 前述の、明治書院の指導書では、これについても一言も触れられておらず、現場では隴西と魏略の関係について混乱が生じているようである。
- (5) 隴西李徴、皇族子、家於魏略。(新釈漢文大系『唐代伝奇』(明治書院) 一七五頁。) 以下、「人虎伝」の引用は、同書による。
- (6) 高祖神堯大聖大光孝皇帝、諱淵、字叔徳、姓李氏、隴西成紀人也。(中略)(父の)仁公生高祖於長安。(『新唐書』高祖本紀)
- (7) 孟秋之月、日在翼、昏建星中、日畢中、其日庚申、其帝少皞、其神蓐收、其蟲毛、其音商、律中夷則、其數九、其味辛、其臭腥、其祀門、祭先肝。涼風至、白露降、寒蟬鳴、鷹乃祭鳥。用始行戮。……
- (8) 『國説俳句大歳時記 春』角川書店 昭和三九年
- (9) 『古今和歌集』の最初は、後掲の在原元方の歌(注20参照)で、十二月中に立春の来たことを詠んだ歌であるが、二番目は紀貫之の「春立ちける日によめる」の言葉書きのある「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ」である。これについては『礼記』月令孟春の月の「東風解氷」の影響が指摘されており(『古今和歌集』新日本古典文学大系 小島憲之・新井栄蔵 校注 岩波書店 一九八九年 一九頁)、また秋の最初の歌である藤原敏行の歌(注12参照)にも月令の影響が指摘されている(同書六五頁)。これらは一例であり、月令と『古今和歌集』の春夏秋冬の部立ての関係は深いと思われる。
- (10) したがって、まだ太陽の出ていない真っ暗な中で、李徴は袁修を認めるのであり、不思議な設定のような気もするが、虎はネコ科で夜行性の動物であるということと理解しておいてよいのかもしれない。
- (11) 距日冬至四十五日條風至。條風至四十五日明庶風至。明庶風至四十五日清明風至。清明風至四十五日景風至。景風至四十五日

涼風至。涼風至四十五日閏風至。閏風至四十五日不周風至。不周風至四十五日広莫風至。〔淮南子〕天文訓

(12) 『古今和歌集』秋歌上の、藤原敏行のこの和歌には「秋立つ日よめる」の詞書きがあるので立秋の日の歌である。

(13) 以下、引用した『説文解字』及びその注釈等の原文は次の通り

「寒也。從人令声・薄也。從水京声」(『説文解字』)、「涼以水和酒也・薄則生寒、又引伸為寒」(『説文解字』段注)、「涼微寒也」

(『字林』)、「薄寒曰涼」(『集韻』)

(14) 韻書とは、字書の一種であるが、韻によって分類したものを言う。

なお、引用した文の原文は次の通りである。「涼、佐也。詩涼彼武王。一曰、冷也。」(『集韻』)

(15) 「寒・涼。同。熱、相對。」(『漢語大字典』四川辞書出版社他)

(16) 『万葉集残考』(高井宣風著)では、「こがらし」と読むべきとする。

(17) 『萬葉集釋注』六 集英社 一九九七年 三五八頁

(18) 『図説俳句大歳時記 秋』角川書店 昭和三九年 二七頁参照

(19) 壬戌之秋、七月既望、蘇子与客泛舟、遊於赤壁之下。……白露橫江、水光接天。……(経進東坡文集事略)

(20) この点については、拙考「管子幼官篇について―三十節氣を中心に―」(日本中国学会報第四十二集 一九九〇年)参照。

(21) 月が地球を一周するのは、約二十八日である。ただし、地球が太陽の周囲を移動しているために、満月から満月までの間は二十九・五日になる。

(22) このずれを考えず、閏月を置かずに一年を三百五十四日で計算しているのが本当の太陰暦であって、イスラム暦がそうであると言う。

(23) 『古今和歌集』・春歌上

(24) 『中国史暦日中西暦日対照表』(上海辞書出版社 一九八七年)で、天宝元(七四二)年から大暦十四(七八〇)年までの約四十年を調べたところでも、閏七月は存在しなかった。それほど確率的には低いことなのである。